

【講演会等報告】

13～18 世紀の中国史料にみえるアイヌ

中 村 和 之

開 催 日 : 2011 年 11 月 13 日 (日) 13:00～13:50

(2011 年度 第 2 回研究会における講演)

開催場所 : 函館市地域交流まちづくりセンター 3F 研修室

講 師 : 中村和之 (函館工業高等専門学校 教授)

歴代の中国王朝で、アムール河の下流域に支配力を及ぼしたことが、史料的に明確なのは、元朝・モンゴル帝国である。そのため『元史』や『国朝文類 (元文類)』などの史料には、骨嵬が見える。骨嵬とは、ニヴフ語またはツングース諸語でアイヌを意味する、*kuɣi*～*kuyi*～*kui* を漢字の音で表わしたものである。また報告者は、『元史』巻 5、至元元 (1264) 年 11 月辛巳の条にみえる亦里于についてもアイヌであると考えている。

『国朝文類』には、骨嵬の人名が見える。瓦英 *ua-iəŋ*、玉不廉古 *iu-pu-liem-k'u*、玉善奴 *iu-ɕiən-nu* の三人である。このうち、瓦英と玉善奴については、近世・近代アイヌの男性の名前に通じる特徴を見いだすことができる。アイヌ語の *ainu* には、神に対する人という意味と、男性に対する女性という意味がある。アイヌの男性の名前には、～*ainu* という語尾のものがある。語尾が無声化すると、～*ain*となる。コシヤミンやシャクシャインはその例である。瓦英と玉善奴の名前は、～*ain*というアイヌの男性の名乗りを、漢字で音写したものであろう。またこのほかに、吉烈迷人の多伸奴 *tuo-ɕiən-nu* と亦吉奴 *iəi-kɕiəi-nu* の二人の動きは興味深い。吉烈迷とは、ツングース諸語でニヴフを表す *gillemi* のことである。さて多伸奴と亦吉奴の二人は、史料では吉烈迷とされているが、彼らの名前には骨嵬の名前の特徴を見て取ることができる。しかもこの二人は、至大元 (1308) 年に「(骨嵬の) 玉善奴と瓦英等が降を乞うている」ことを元朝に伝え、骨嵬と元朝との間を取り持とうとしているのである。この二人については、史料のここにしか登場しないので、これ以上は何も言えない。しかし、アイヌとニヴフの混血であった可能性や、ニヴフ語の堪能なアイヌであった可能性などが指摘できる。いずれにせよ、この時期のサハリン島でアイヌとニヴフとの間に、密接な関係があったことは間違いない。

1308 年の記事を最後に、中国史料にアイヌに関する記述はしばらく見えなくなる。次にアイヌに関する記述が現れるのは、明代の初期のことになる。明の永楽帝の命令でアムール河の下流域に遠征したイシハは、現在のティル村にヌルガン都を設置し、永寧寺を併設した。そして、寺の建立の経緯を記した石碑を立てた。これが、永楽 11 (1413) 年の「勅修奴兒干永寧寺記」と宣徳 8 年 (1433) 年の「重建永寧寺記」である。これらの石碑では、アイヌは苦夷とされているが、これは元代の骨嵬と同じことである。だが、「勅修奴兒干永寧寺記」と「重建永寧寺記」がアイヌについて記す情報は、実はさほどのものではない。せいぜい、苦夷が独自の言語を持っていること、明朝との間に朝貢関係を結んでいること程度しか記されていない。

アイヌについての詳しい記事を残すのは、明代の二つの地誌、すなわち『開原新志』と『遼東志』である。『遼東志』は 1443 年、1488 年、1529 年の合計 3 回にわたって編纂された。現行本は 1529 年の重修本であるが、1443 年の初訂本の記述を残している可能性がある。また

『開原新志』は、現在は失われており、『明一統志』に引用された部分しか残っていないが、明初の成立と思われる。この二つの地誌には、苦兀^{クイ}についての記載がある。苦兀は、苦夷と同じである。さて、『開原新志』と『遼東志』に共通する内容は、下記の5点である。

- (1) 熊皮を頭に戴くこと
- (2) 花布を着ること
- (3) 父母の死体から内臓を取り除いてミイラを作ること
- (4) 食事の際に、父母のミイラに対して何らかの儀礼をすること
- (5) 弔いが三年間で終わること

つぎに『遼東志』のみにみえる内容は、以下の2点である。

- (6) 木の弓を用い、矢が1尺余りであること
- (7) 鏃に毒を塗ること

上記のうち(6)については、明代の1尺は約32cmであり、伝世するアイヌの矢は40cmから50cmであるから、1尺余りという『遼東志』の記述に対応する。また(1)や(7)は、近世のアイヌ文化についての記述に対応する。(3)については、間宮林蔵『北夷分界余話』に対応する記述がある。一方、(2)(3)(5)については、日本側の史料に対応する記述を見つけることはできない。

清朝は17世紀以降、アムール河の下流域からサハリン島(樺太)にかけての地域に、辺民支配を及ぼした。そのため清代の漢文・満洲文の史料には、庫野^{クイェ}(kuye)についての記述が見える。庫野とはアイヌのことである。本報告では、謝遂『職貢図』について紹介する。『職貢図』は、漢文と満洲文の対訳という満漢合璧^{まんかんがっぺき}の史料である。この庫野の項には、以下の6点についての記述がある。

- (1) 東の海島の雅丹(yadan)・達里勘(darikan)などの地名
- (2) 男性の髪容
- (3) 草の笠(草の編み帽子)
- (4) 赤い布と卍の字
- (5) 女性の入れ墨
- (6) 鋭利な腰刀

これらのうち、(1)のヤダン^{ヤダン}は地名ではなく、サハリン西海岸のナヨロに居住していたヤダンというhala(姓)の呼び名である。ダリカンとは、東海岸のタライカのことである。(2)はサハリンアイヌの男性の髪容についての記述に対応する。(3)もサハリンアイヌに特徴的なイナウカサのことと思われる。(4)は切り伏せ文様、(5)はアイヌの女性の入れ墨、(6)はマキリのことと思われる。このように上の記述は、主にサハリンアイヌに対応した内容である。

以上のべてきたように、元代の骨嵬は除くとしても、明代の苦夷・苦兀と清代の庫野についての記述は、いずれも近世のサハリンアイヌの生活文化の記録と対応している。したがって、15世紀の初頭の明代の初期には、サハリンアイヌの文化が成立していたものと考えて良いであろう。それは、アイヌ文化が15世紀の初頭までには形成されていたことを意味する。

(なかむら・かずゆき／函館工業高等専門学校)